

立教百五十九年一月二十六日、教祖百十年祭を迎えるにあたり、一言、論達をもって、全教の心を一つにしたい。

親神様は、旬刻限の到来により、教祖をやしるに元のぢばに現れ給い、世界一れつをたすけるだめの教えをお啓きくだされた。

以来、教祖は、月日のお心のままに、元初まりの真実を明かし、かしもの・かりものの理を説いて、たすけづとめを教え、陽気づくめの誠の道をおつけくだされた。そして明治二十年正月二十六日、この道を通る子供の成人をひたすらお待ちくだされ、定命を二十五年縮めて、御身をおかくしあそばされた。しかも、子供を思う親心から、今も存命のまま元のやしきに留まり、よろづたすけの上にお働きくだされている。

この道にお引き寄せいただく道の子一同は、立教の本旨に思いを致し、おかけいただく教祖の大いなる親心にお応え申さねばならない。旬を仕切つて、一手一つに、この教祖のお心に応えて、たすけ一条の歩みを、ひながた通り、一人ひとりが、真剣に実践し、成人することが、教祖の年祭を勤める意義である。教会長といわず、よふぼくといわず、また、信者といわず、一人ひとりのたすけ一条の成人の実が、結果としては、教会の内容充実に現れるご守護をいただきたいと願つてやまない。

およそ真面目に信仰する者なら、教祖のひながたを手本に、真つすぐ道を歩もうと思わぬ者は無い。しかし、時には、様々の事情や身上をお見せいただき、磨きをおかけいただくこともある。容易ならぬその中を、挫折することなく、ひたすら教祖の道すがらを見つめて真剣に通れば、何も心配は要らない。神一条とはそのことであり、これがひながたをたどるよふぼくの力強さである。

そもそも、教会は、ぢば一つに心を寄せてつとめをする神一条の精神に許されたものである。

よふぼくの一人ひとりがその自覚に立って、たすけ一条の勤めに励むところには、事情の起る隙はない。煩わしい事情や身上は、これを忘れ、人間思案の我欲に負けて、ともすれば、一手一つの心が乱れる時に起こりがちである。

おききさげに、よふぼくの生涯の理を論じて、誠一つを仰せ下される。この誠の道は、教祖が御自らお通り下された、五十年のひながたにお示しいただくところである。

誠は言うは易く、行ふは難しい。この難しい誠の道も、教祖のひながたを見失わぬ限り、通り切らせていただくことができる。こんな有難いことはない。

一名一人の心に、この誠一つの理があれば、内内は十分睦ましく治まり、陽気な姿が教会にも現れ出る。みな揃うて誠の心なら、その精神に乗って、親神様は、いかな自由の守護もお見せくだされる。

道の子は、等しく、心の成人をお待ちくだされている教祖の親心にお応え申して、日日は、ぢば一つに心を寄せて、神一条、たすけ一条に、尽し運び、慎みと報謝の心で、誠の道を、仕切り根性、仕切り力、仕切り知恵をもって、積極的に歩み抜かせていただき、自らの成人の実が、陽気ぐらしの手本と言われる教会の内容充実に現れ出るように、願ひ通らせていただきたい。

みかぐらうたに、

みなせかいがよりあうて

でたちきたるがこれふしぎ

よう／＼こまでついできた

じつのたすけハこれからや

いつもわらはれそしられて

めづらしたすけをするほどに

と仰せくだされている。

ただひたすらに、つとめをお急き込みくだされた教祖に、各々が、一步一步の地道、且つ、力強い歩みをすすめ、年限に相応しい成人の実をもって、応え奉らんことを切望する。

三下り目 3

三下り目 4

三下り目 5